報徳@なう
発行人：本岡俊郎

お米を配布しました。

こども家庭庁の助成事業を受託し、この2月3月で111の子ども食堂、ひとり親家庭支援団体、フードバンクなどにお米(2kg袋)51000袋提供しました。重量では102トンです。報徳食品支援センター単独で、行える規模ではなく、フードバンクTAMA、フードバンクかながわとコンソーシアム(協働体)を組み、提供した地域は主に神奈川県と東京都でした。コロナ禍が去って提供されるお米の量が大きく減少しているので、歓迎されました。



なぜ？続けてられるのか。

報徳食品支援センターの活動は、この4月から5年目に入りました。私自身は2009年からフードバンク活動を始めましたから15年目になります。多少の手当をいただいた時もありましたが、無報酬で続けてきました。時々、「よく何ももらわないで、続けられますね」と言われる事があります。

振り返ってみれば、ごくまれに食品をお渡しした方から真心のこもったお礼を言われる事があります。言葉だけでなくて感謝の眼差しを感じます。そのお気持ちを受け止めた時に「この仕事をしてきて良かったなあ」と思うのです。

先日、ガスも電気も料金滞納で止められて、お金も無くなった男性の高齢者が突然現れました。食品が欲しいと言われても、煮炊きもできない方に渡せるものは限られてしまいます。どんなものを食べているのかと聞きますと、お金があるうちは、コンビニでそのまま食べられる物を買って食べるという返事です。結局水を加えるだけで食べられるアルファ米、レトルトのお粥、缶詰等を手提げ袋に入れて渡しました。帰って行ったと思って外を見ると、出口で座って袋の中身を見てられました。その時にふと思いついて「ラーメンを食べませんか」と声を掛けたら、中に入ってきました。黙々と温かいカップヌードルを食べてられたので、「もう一杯食べますか？」と尋ねたら「欲しい」。

しかし、2杯目は口をつけただけでした。「これは持って帰る。食べれると思ったけど、ダメだった。」胃袋が小さくなっていたのでしょう。お湯の入ったカップヌードルをビニールの袋に入れて帰られました。帰られた後「この仕事をやっていて良かったなあ」とじわっと喜びが浮かんできました。こういう瞬間がたまにあるから、続けているのです。



活動に直接かかわっているメンバーの方は、このような体験をされています。いろいろ考えて準備した食品を渡しても、ちゃんとした挨拶もなく当然のように持って帰られる方が多い中で、活動を続けられるのも、そういう経験が支えとなっているのは間違いありません。

コロナ後遺症？

コロナに感染した人の後遺症が問題になっています。私達の活動でも「コロナ後遺症」と言いたくなるような現象があります。コロナ禍の以前と今では、ある変化があります。

それは、食品をお渡しする時にお礼を言われる方が減った事です。何もお礼の言葉を期待している訳ではありませんが、苦労して準備した食品をお渡しした時にお礼の言葉があると嬉しいのです。この3年余り何度も配布活動を続けて来たので、もう当たり前のことと感じておられるのでしょうか。



同じような現象が子ども食堂でもあるそうです。コロナ禍のために食事の提供からパントリーに切り替えた当初は、「私の所でもいただいても良いですか？」と尋ねるお母さんがいたそうですが、今では誰もそんなことは言わなくなった。

社会福祉協議会でもコロナ禍の緊急貸付金の返済が始まっていて、職員が返済の督促をしてい

ますが、「返さなくても良いのだろう」から始まって文句を言う人はいても、お礼を言う人はまずいないのだそうです。

寂しいかぎりです。「ありがとう」は美しい日本語、日本人の美徳を象徴する言葉で残念な気持ちになります。幸か不幸か、フードバンクに入って来る食品が大幅に減っています。これからは、この少なくなった食品を配る時は、本当に困っている人に配るように心がけて行きたいと思います。

公明党議員団来訪

五月一日公明党衆議院議員古屋範子副代表と食品ロス削減推進プロジェクトチーム(参議院議員竹谷とし子座長)一行が視察に来られました。地元県議・市議も同行した為総勢十名を超える賑やかな来客となりました。





本岡理事長は、まず最近の当センターの状況を説明し、特に冷凍食品の扱いが毎年増加の傾向にある事からその背景を詳しく説明しました。

品質に全く問題ないにも関わらず外箱が一部でも破損していたら破棄される。又輸入時の港での検疫抜き取り検査で数個でも１箱から抜き取られたら残り全部が廃棄される商品が多数発生する。そのような商品を当センターは引き取って、中味が問題ない事を確認してから配布している事を、現物を見せながら説明しました。



更に当センターが近年力を入れている高齢者支援についても食品を定期的に配布している市営住宅での取組みについて話ました。高齢者の方達は生活が苦しくなっても助けて欲しいと言う声を上げられません。そのような方達を見つけて支援につなげて行くためには、社会福祉協議会等の地域行政との連携が不可欠であると話して来訪者の皆さんも頷いておられました。竹谷座長は「フードバンク活動での冷凍食品流通網を整備して、支援が必要な人に届くよう後押しをしていく」と話されました。

来訪された議員の方達にとってフードバンクの現場での活動状況、特にコロナ禍前後の活動の変化を知る機会となり、また我々も普段お付き合いしている行政関係者とは違う政治家(今回は特に国・県・市)の方達との交流が持てた事が大変有意義であったと思います。今後に於いても当交流会を機に更なる発展を目指し活動を図って行きたいです。

継続的支援！

小田原市内の市営住宅の支援開始から２年になります。現在も定期的に各集会所において交流を兼ねた食品配布を続けています。

当初は、コロナの影響でじっと家に籠っているのが当たり前で集会所に来られるのも大変な方が何人も見られましたが、今では、楽しみにしていただけているのか表情も明るく、足取りも軽くなっているように感じました。短い時間ではありますが、地域の交流もできているような会話が耳に届きました。『今日は、〇〇さんが来られないって言ってたから、預かってあとで届けるよ！』住民の間でちょっとした会話のきっかけになっているようで微笑ましかったです。自治会、地区社協、包括センターそれぞれの立場で協力しながら、今後も高齢者支援を継続して行きたいと思います。

会費納入のお願い

新年度を迎え継続的な活動を維持していくための会費の納入をお願いいたします。

